

本部の九月の例会がすみました。徳山の檜部區市民母子、河内の中務さん、廣の中松さん、慶澤和尚、まりふの佐々木君、能美の沖田功君、徳山の鴨井いし、正覚寺の奥さん。それに佐々木ちえ子等々が集つて、嬉しい有難い例会でありました。和讃講義は「諸経のころによりて弥陀和讃」でありました。仏の影現と、応現の問題が中心となり、法華経の述門本門の開顯等、法華経について味わせて頂きましたが、大層有難いことでした。

近頃、誰からともなく例会に眼をつけはじめ、例会第一の声さえ聞くようになりました。例会は小人数ですし、粒が揃っているし、私自身まことに救われます。今から毎月の例会にはかゝさぬと言う人さえ出来ます。ただ遠い地の同胞が気の毒です。ああ、このみ法をあゝの石州の毒舌大和尚に、台湾の大島母子に、甲に、乙に、丙に、講義の最中さえ、脳裏に人間がこのこ出て来ます。

本部の例会が有難くなつた原因の一つは、本部内の求道熱の興起したことです。本部の者はもちろん、お手伝いに来ている、鴨井、佐々木両女等々も、全く念仏求道三昧です。みんな心を一つにして精進しています。

時々、夜、私の部屋に皆でおしかけて来て座談会になります。この狭い部屋へ一ぱい、時には夜一時頃までがんばって私の仕事の邪魔をします。しかし嬉しい邪魔です。

二つの指導精神があつたり、反逆者がいたり、無関心な人がいたり、人間的幸福をのみ求める者等が、宗教陣営に一人でもあると全体の調子を乱します。今、本部は皆様がいつお帰り下さつても、喜んで一つにとけて頂けるような空気が流れています。本部へ本部へと念じつつ、未だ一度も帰ることの許されない同胞を悲しまずにはいられません。

十二月の報恩講、今から盛会が予想されます。毎日誰かの手紙に「必ず帰らして頂きます。今から待ちに待っています。」と言つてよこします。本年は、曇鸞大師の宗教を講義することに決定しました。皆様今からその仕度でお待ち下さい。

今日からまた旅に出ます。五日から十八日までが、島根県各支部中、大麻、一ノ瀬、井野、益田、浜田の五ヶ所、杵束と鎌手をぬきます。杵束は浄久寺の奥様が御病気が悪いのです。鎌手は八月各支部連合の聖講があつたからです。

和尚は鎌手浄円寺へゆきます。この度の前講は吉村好勝君です。小郡から一緒になることになっています。和尚と吉村と私と三人の旅になります。誰かが、三人の旅と聞いて、羨やましさをしていることでしょう。

十九日から、山口県都濃郡長穂村、須々万支部善徳寺、久米支部正覚寺であります。山口県の盛会を、同胞達が手ぐすねひいて待つているのが見えるようです。

同胞よ。仏法は外にはなくて内にある。内を培え。黙々として内を培え。内を培うための必須の条件が教法を聞くことである。

猫は私の膝に眠っている。如何に私になれても、猫は猫である。もし教法に真に耳を傾けないなれば、本部にいたつて猫と何の変わりがあるう。

人にして猫と同一になる。そこには心内に一切の教えを拒むおそるべきものがないのだ。すでに病膏盲こうこうに入つてついに正法に耳を傾けない時、人は猫よりも恐るべきである。内に培かわれ、内に充実し、内にともされたる燈が、家庭の、社会の光ともなれば、初めて生きることの喜びが許されます。

時はあまりにも早く過ぎ、正法はあまりにも深く、人の命はあまりにも短い。今日一日正法なき日を過ぎせたもうことなかれ。

本月号は、欲の問題と、人間愛の問題とを載せた。人は動く、あるいは人をさしまねき、あるいは人を斥ける。一を愛と云い、一を憎と言う。愛憎は慈悲ではない。美しく咲いた花は人をまねかず、人を排斥せず、太陽また一切を撰めて自ら輝く。されど慈悲は如来それ自身なり。反逆者を悪まず、好む者に厚からず、むしろ反逆輪廻の子に重し、この大悲を領解する時、人ははじめて救いを感じる。憎きものをば悪みきり、好きなるものは好ききるところ、そこには白道はあり得ない。されど慈愛とは、病犬を野に放ち、犯人をも温情に甘えさせ、規律も仁義もなくなつた、でたらめの世界ではない。

秋来りぬ。人生は厳粛なりと窓辺の風は語る。同胞よ精進せよ。健在なれ。

「総体人には劣るまじきと思う心あり、この心にて世間には物を為習ふなり。仏法には無我にて侯ふ上は人に負けて信をとるべきなり。理を見て情を折るこそ仏の慈悲よ。」と仰せられ候。(御一代聞書)